

富士・沼津・三島市博物館共同企画展

富士・愛鷹・箱根山麓の縄文時代



信仰のムラ（三島千枚原遺跡） 一作画：鈴木修司一

会期 平成12年1月3日(月)～2月27日(日)
会場 三島市郷土資料館
主催 富士・沼津・三島博物館連絡協議会

関連講演会「千枚原遺跡と縄文時代のまつり」

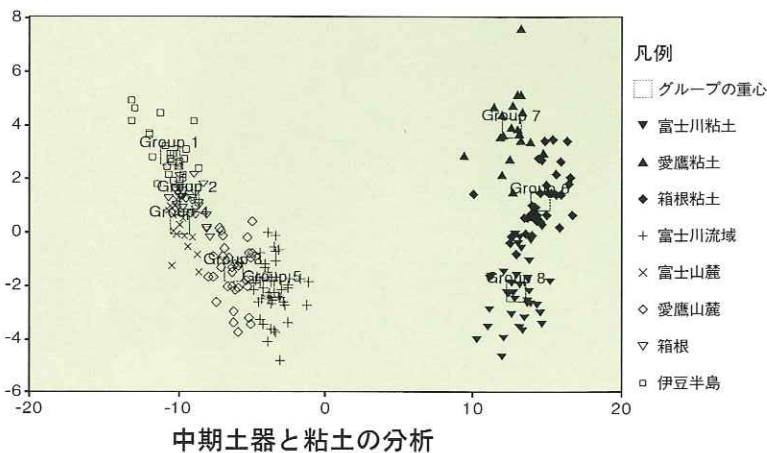
講師 瀬川裕市郎氏（沼津市歴史民俗資料館）
日時 平成12年1月22日(土) 14:00～16:00
会場 三島市民生涯学習センター（入場自由）
主催 三島市郷土資料館

富士・愛鷹・箱根山麓の縄文時代

富士・愛鷹・箱根山麓にはそれぞれたくさんの縄文時代遺跡が残されていますが、それぞれに共通して土器や石器などの日常の生活用具の素材には恵まれておりません。

これらの山麓の遺跡からは、黒曜石、頁岩、砂岩、チャートなどでつくられた石器が数多く発見されていますが、これらの石器の石材は、それぞれの山麓からは産出されません。

この山麓で産出される石材はせいぜい安山岩と玄武岩で、箱根の一部に黒曜石の原産地がみられる程度です。ときにこれらの山麓から安山岩や玄武岩による石鏃や斧といった利器も発見されますが、ことごとくこれらの山麓のものではないといえます。唯一、この山麓の石材が利用された例としては、木の実を砕いたり、また、小動物をミンチにする際の道具とされる石皿（臼）と磨石（摺り棒）のみのようです。



またこれらの山麓では土器にする粘土にも恵まれていません。

左の図は周辺地区の粘土と山麓の土器を比較分析したのですが、粘土と土器はまったく異なった位置にまとまります。

そしてこの地区の土器の粘土を分析すると、大方が甲府盆地や八ヶ岳の西南麓の土と共通するという分析結果もあります。

この山麓の縄文時代は日常の生活用具、土器や石器の材料に恵まれていないといえます。

そしてまた、この山麓の住居跡の多くは“仮設的”であったという見解もあります。仮設的というのは、竪穴住居の掘り込みが浅く、掘立柱は細く、埋め込みも浅いというものです。

さらにつき加えれば、住居の面積も狭いということもあげられます。

竪穴の掘り込みはその後の地変などにも影響され、本来の状態では計測できない場合もありますが、概して20~30cmと浅いものが多いといえます。柱穴も直径で20cmくらいのもが多く、それがせいぜい30cmほど埋められているにすぎません。面積も30m²を越えるものはまったくありません。

このような住居跡を“仮設的”と呼んでいます。これに従うと静岡県内の縄文時代の住居は、そのほとんどが“仮設的”ということになります。

実は山梨県、長野県、神奈川県、東京都などの周辺地区の縄文時代住居にも、“仮設的”とされる住居は見られます。ところがそれらの地区には、決まって、面積も30~50m²の広さを持ち、竪穴の掘り込みも7~80cmもあり、柱穴の直径も50cmを超えるものが含まれています。そして柱は深くがっしりと埋められた住居が何棟も見られます。言い方を変えれば、静岡県の縄文時代の住居には、“仮設的”な住居に対応するがっしりとした“本格的”な住居が見られないということです。

また、さらに一軒一軒の家財道具、土器や石器の量を比べると、長野県などでは平均すると一軒あたり十数個の土器を持ち、数十点の石器を持つ例が多いといえます。一軒あたりの持ち物の少ない点も、この山麓を含めた静岡県の縄文時代の特徴といえるでしょう。

縄文時代の山間のムラ 富士山麓の天間沢遺跡の事例から

天間沢遺跡は富士市と富士宮市の境の南に延びる丘陵上、標高100mほどにある縄文時代成熟期の遺跡です。天間沢遺跡からは、これまでのところ多数の竪穴住居跡や墓地、さらには「祈りの場」ではないかと考えられる空間などが発見されています。そしてこれが富士山麓の一角を占める地点から発見されたことにより、縄文時代成熟期（いまから4500年ほど前）の山間の集落であると考えられています。

さらに遺跡の正面には富士山がどかっと腰を据えており、その頃も富士山の豊かな恵みを受けながら、この地域最大規模の縄文集落となってきました。

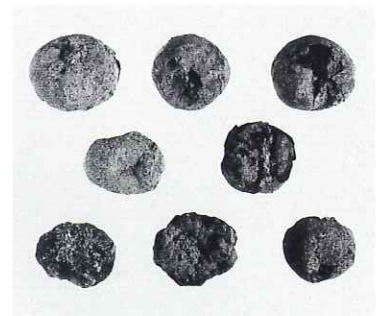
天間沢に人々が暮らしていた頃、富士山は盛んに活動していました。

おそらく現在の富士山より僅かに背の低い状態であったと思われますが、天間沢の人々にとっては豊かな自然の恵みを与えてくれる山であり、同時に、時として火を噴く、恐ろしい山として畏怖の念も強くいだき崇拜の対象ともなっていたと思われます。

下の表は富士・愛鷹・箱根山麓などの、いくつかの縄文時代成熟期遺跡の石器の保有率を示したものです。成熟期の千居遺跡、天間沢遺跡例が富士山麓で、中峰遺跡、桜畑下遺跡例が愛鷹山麓の例を示しており、千枚原遺跡、奥山遺跡は箱根山麓の類例です。

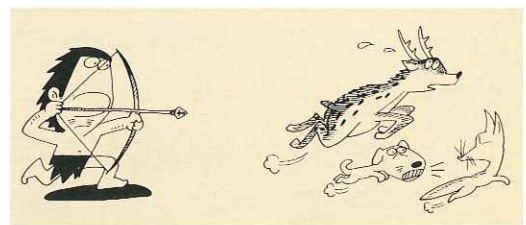
この表では打製石斧は土掘り具、石鏃を狩猟具、石皿を木の実などの加工具と見立てています。それを根拠にそれぞれの遺跡の性格を考えると、石鏃と打製石斧の保有比が千居遺跡と天間沢遺跡で逆転していることが判ります。また、愛鷹山麓の中峰遺跡ではこの両者が拮抗していますが、桜畑下遺跡では天間沢遺跡同様打製石斧が圧倒しています。箱根山麓の奥山遺跡も打製石斧が多い傾向にあります。これらはいずれも山間の集落と考えられることから、一口に山間の集落といっても、石器の保有率は様々であることが判ります。

土掘り具である打製石斧に、根茎類の採取を主とした採取による生活を想定し、狩猟具とした石鏃に狩猟に重きを置いた生活を想定できれば、天間沢遺跡と千居遺跡では全く逆の生活環境が予想できます。天間沢では採取を主体とした生活だったのでしょうか。



発見されたトチの実
(三島・北山遺跡：成熟期)

時 期 遺跡名	成 熟 期							
	千居	天間沢	中峰	桜畑下	千枚原	奥山	上白岩	大芝原
石器器種								
石 鏃 等	63.5	7.9	35.3	5.6	(13.0)	18.2	52.9	31.5
打製石斧	13.0	64.0	22.5	68.0	(43.0)	47.0	22.6	33.2
磨 石 凹 石 石 皿	18.1	17.7	33.3	15.3	(9.3)	9.1	15.6	15.3
スクレイパー 石 匙 石 剥 片	2.9	9.7	1.0	6.9	(17.2)	24.4	1.7	14.2
磨製石斧	2.0	0.7	3.9	4.2	(4.0)	1.3	4.2	5.8
石 錘			2.0		(11.5)		0.9	
篋・楔・石棒等	0.5		2.0		(2.0)		2.1	



イラスト：黒田とみじ

海辺のムラ 沼津市吹上遺跡の事例から

緩やかな傾斜をもって、幾重にも開析された愛鷹山麓の山裾は、そのまま浮島ヶ原へ連なっています。その浮島ヶ原は縄文時代は、まだ、一面海であったと考えられています。

いまJRが通過したり、江戸時代には東海道として旅人の往来も盛んであった片浜や原地区と山麓との間には、僅かな砂州も形成されていました。また、その頃の黄瀬川扇状地は現在のJR大岡駅あたりから三島駅あたりまでの発達でした。したがって、沼津や三島の市街地、さらには片浜、原地区周辺一帯も“海”でした。

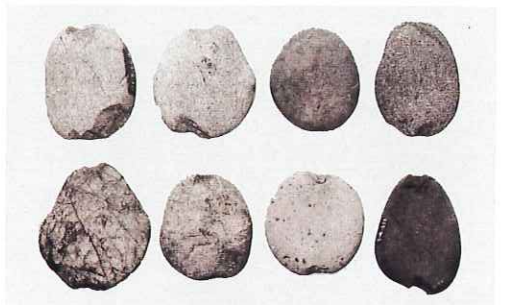
平沼の吹上遺跡は、いまから5,000~6,000年ほど前の縄文時代の遺跡ですが、その標高はおよそ33mほどあって、眼下に浮島ヶ原を見下ろす位置にあります。それは愛鷹山麓末端が崖上に終わっているということで、その縁辺を切り開いて根方街道は造られています。

この吹上遺跡を300mほど南に進むと海辺となりました。また、遺跡から西へ150mほどで小さな入り江となっていて、いまは石川の集落となっています。この吹上遺跡からは、500点におよぶ石器が発見されていますが、その半数は石錘…石の網の錘でした。

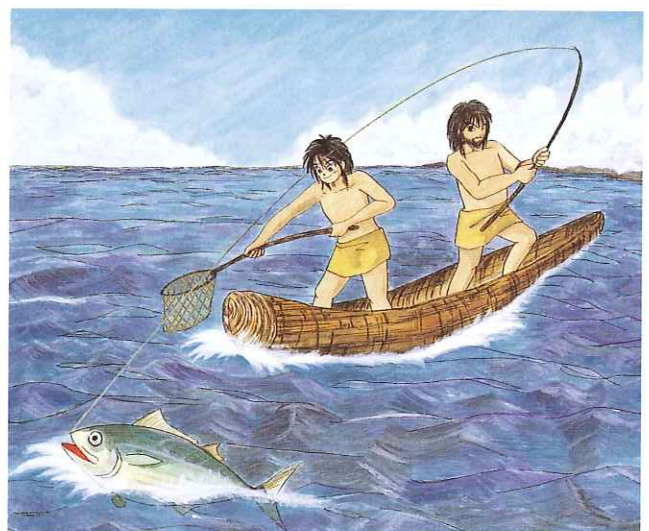
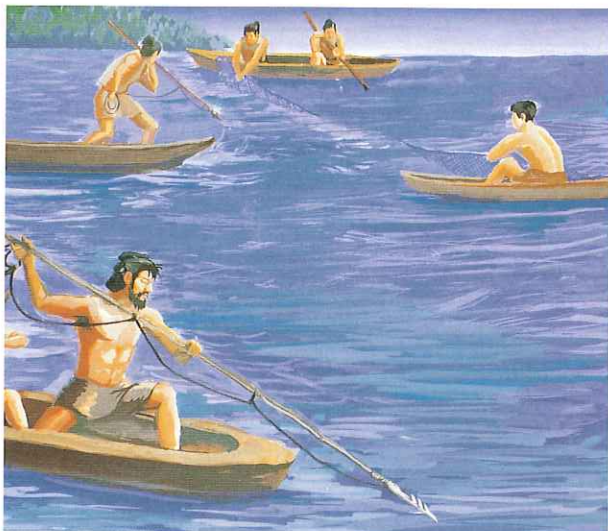
石錘は長さが4~8cmほどで、重さも30~200gほどのものでした。そしてそれぞれがその長軸を僅かに打ち欠かれており、その打ち欠き部を網の底辺に結わえ付けたとされています。網は両端を固定したり、それぞれ船で持ちこたえたりして使われた刺網と考えられます。網は芋の繊維などを絡めてつくったかも知れませんが、刺網へ魚を追い込む工夫もとられていたに違いありません。そして漁のための丸木船も西の入り江には係留されていたでしょう。丘の上の集落では網を繕ったり、そのための繊維を撚ったり、捕獲した魚を日乾しにしたりと海辺のムラらしい風情を漂わせていたことでしょう。



吹上遺跡遠望(▽印)、手前の民家などは海であった



吹上遺跡から発見された石の錘(石錘)



縄文時代の漁(想定図): 福島県立博物館 1997「きかくてん縄文たんけん」より転載

縄文人の祈り・信仰・まつり 三島市千枚原遺跡の事例から

狩猟・漁猟・採集によって食料を獲得し、自然の中に生きてきた縄文人にとって、諸々の自然現象やさらには精霊に対する信仰は、彼らにとって大変重要なものでした。大地の豊穡を願い、病からの解放、安全な出産への願いなど様々であったと考えられます。

それは土偶や石棒、埋甕などの形を取って実行されました。土偶は粘土ひとがたの人形で、妊娠した女性の姿を現したものや手足をバラバラに打ち欠いたものなどが見られます。妊婦をかたどった土偶は新しい生命を生み出す女性の能力にあやかっただけでなく、また、バラバラにされた土偶は、病んだ箇所を土偶に移し、自身はその病からの解放を期待しての行為と考えられます。

石棒は男性器を象徴したもので、住居の祭壇として建てられたり、炉の一部や敷石の一部として組み込まれたものも見られます。

埋甕は住居の入り口部などに埋められた甕で、死産児や早生児を埋葬したとか、出産に伴う胎盤を入れたなど様々に考えられています。いずれも女性がこれを跨ぐことによって、子供の魂が早く戻ってくるとか、住居の入り口付近で多くの人に踏まれ、強くたくましい子に育つようにとの願いの込められたものとされています。

三島の千枚原遺跡の埋甕は、子供がそのまま入ってしまうくらいの大ささで、土器の口を下にして埋められていました。そして土器の底部には、小さな穴が一つあけられており、埋められた子供などの魂の出入り口ともされています。

釣手土器は類例の極めて少ない土器で、県内では5例が数えられています。三島の観音洞の例ではイノシシとヘビを合体させた想像の動物がモチーフとされていますが、いずれにしてもこの土器は、光をシンボルチックに扱う信仰の象徴とされ、呪術的色彩を強く感じさせています。そしてこうした縄文人の信仰の背景には、彼らの靈魂の再生という世界観を顕著に示しているといえるでしょう。



顔面に入れ墨と思われる文様のある土偶
(三島市奥山遺跡 縄文時代中期)



イノシシとヘビの合体モチーフの付けられた釣手土器
(三島市観音洞遺跡 縄文時代中期)



埋甕に用いられた深鉢形土器
(千枚原遺跡 縄文時代中期)

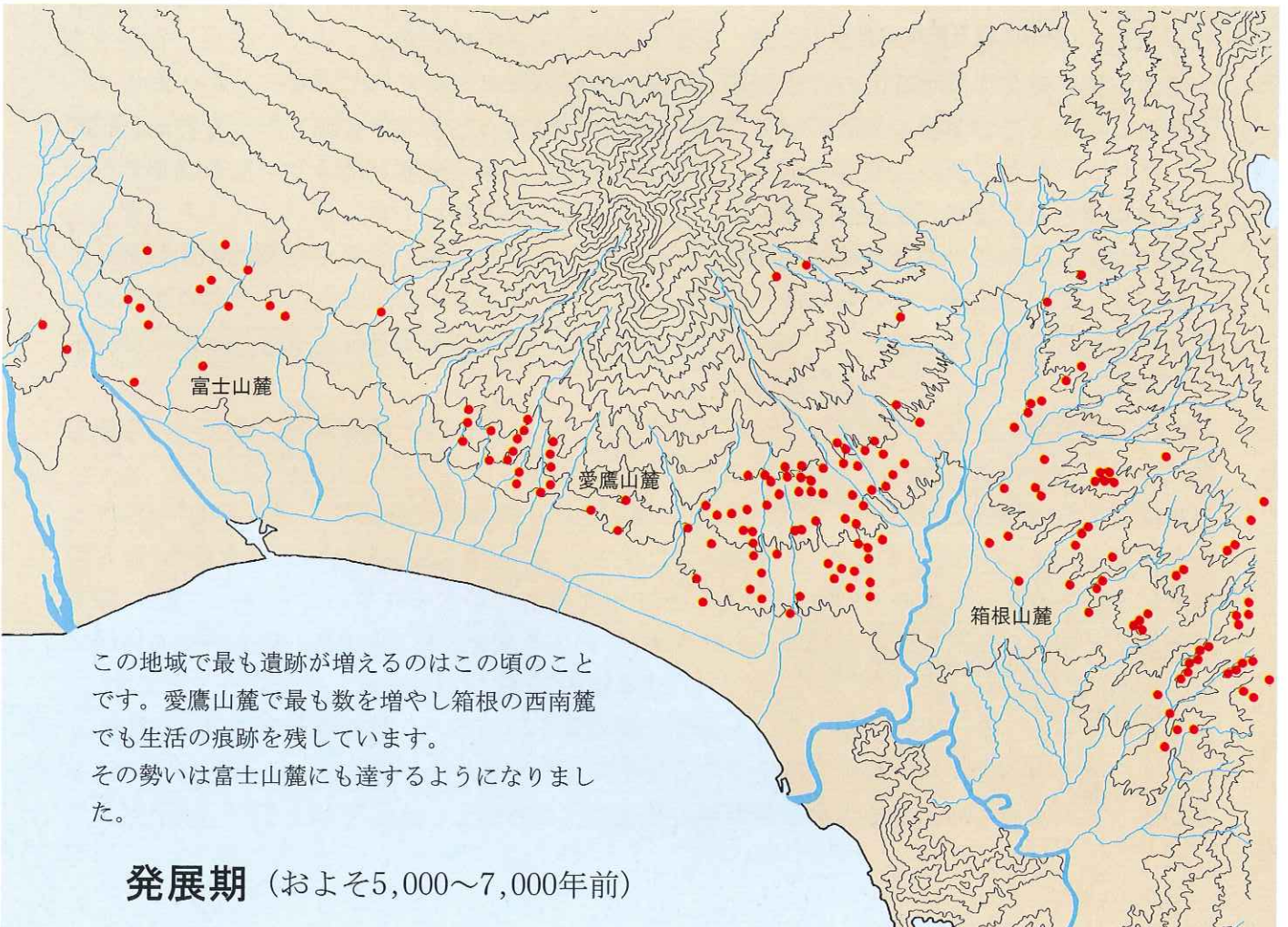
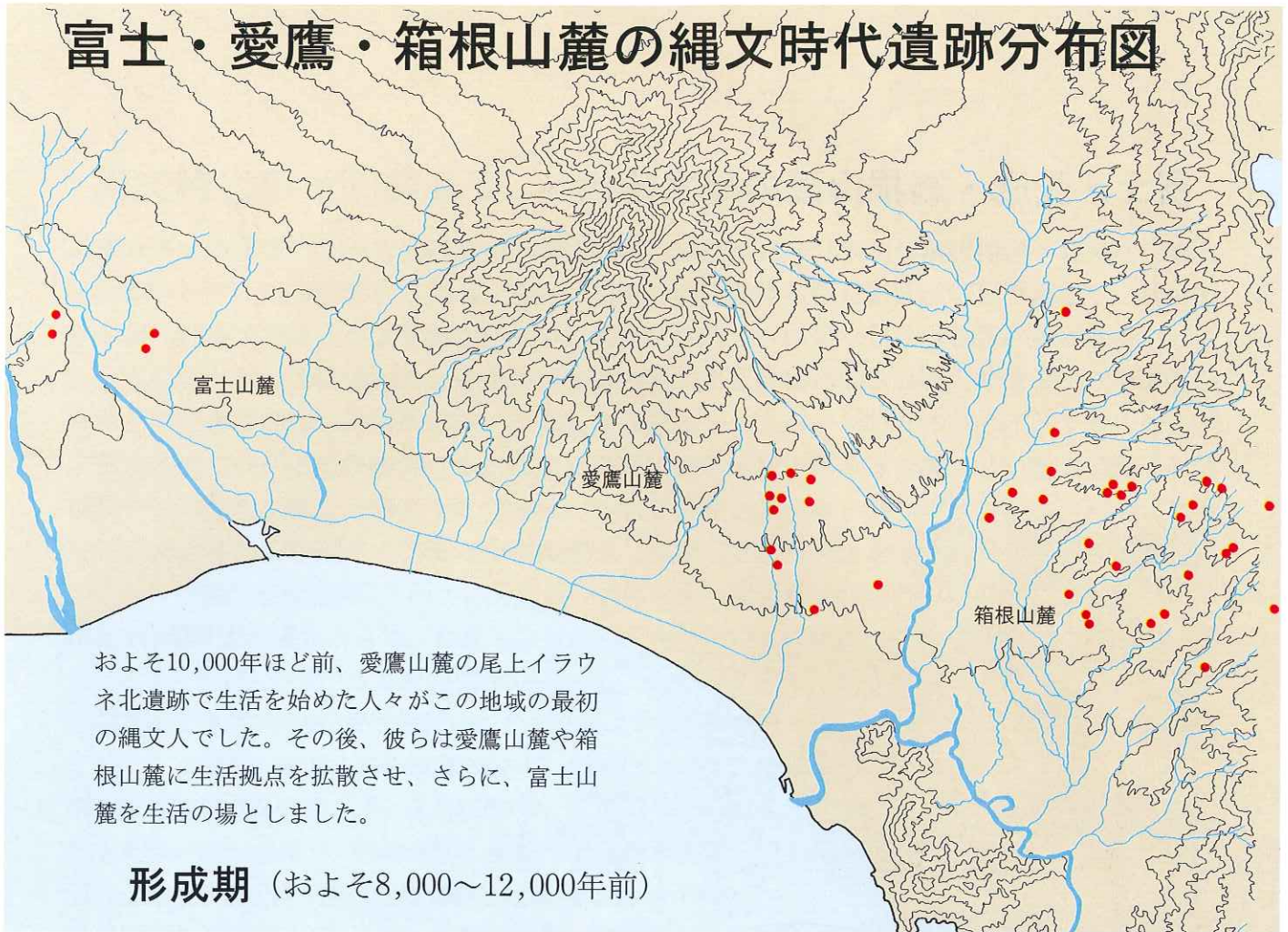


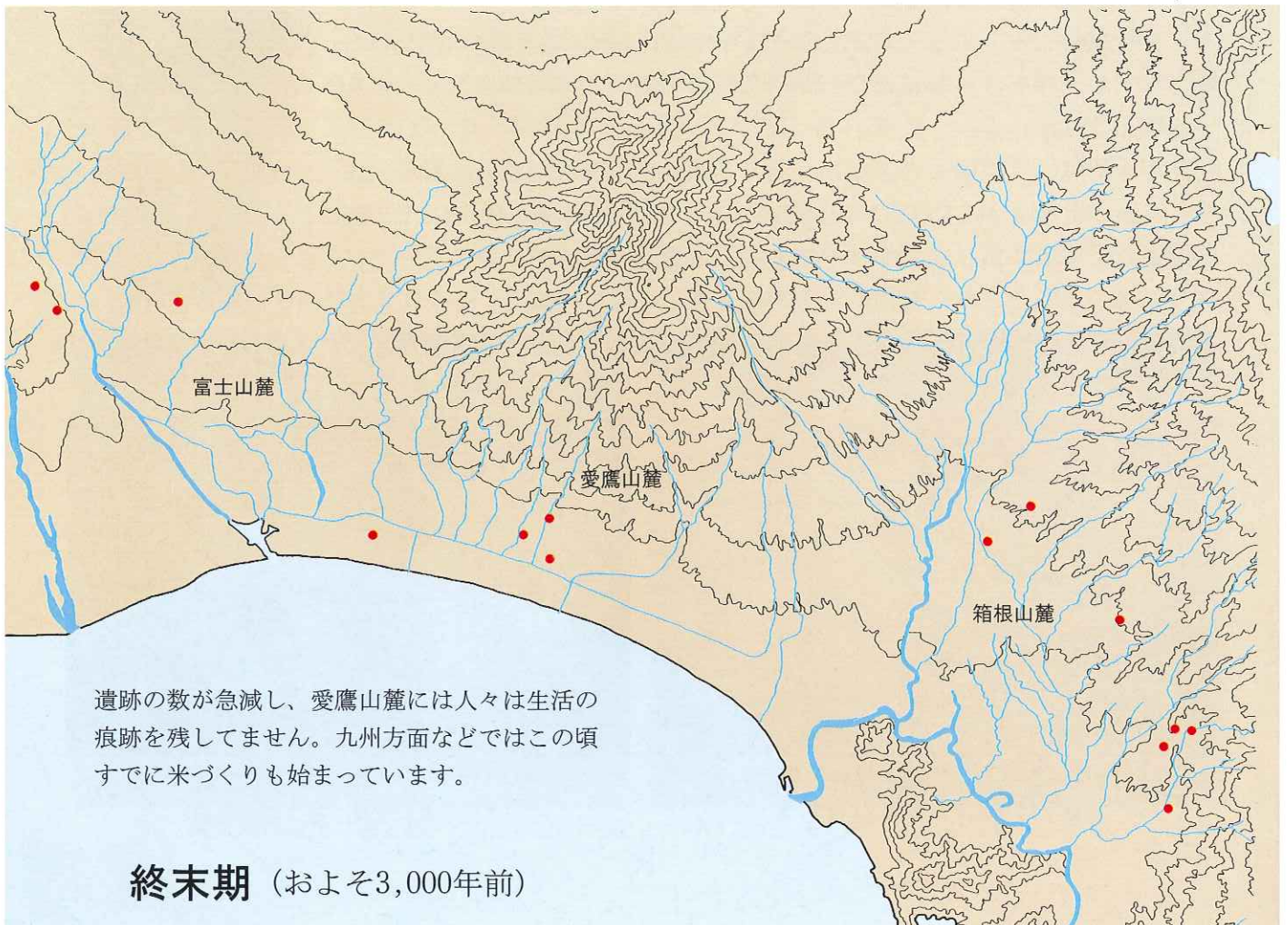
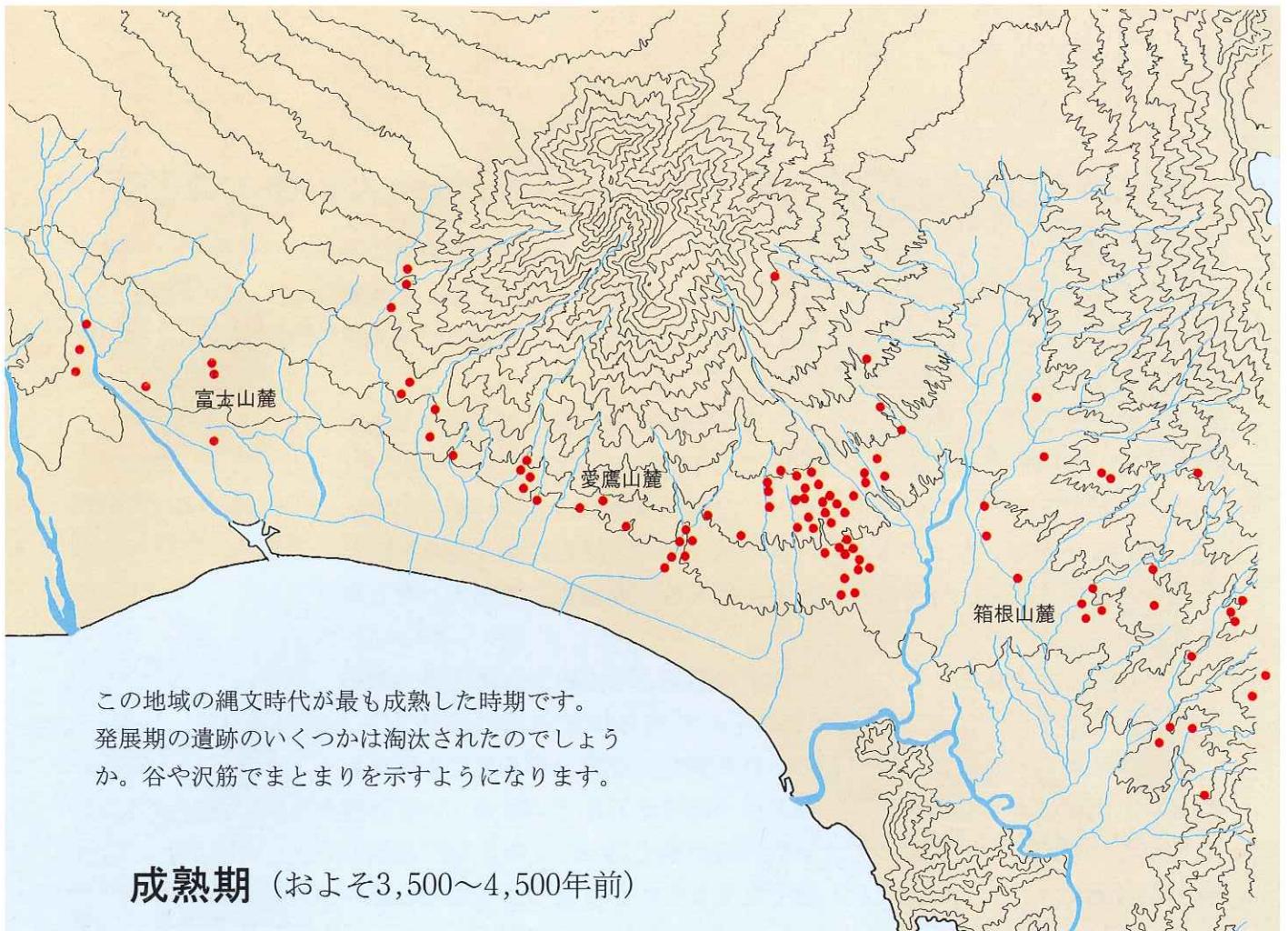
石棒の樹立した祭壇を持つ住居址
(三島市観音洞遺跡 縄文時代中期)



入り口部敷石に組み込まれた石棒
(三島市北山遺跡 縄文時代後期)











富士・愛鷹・箱根山麓の縄文時代遺跡分布図





縄文土器の移り変わり

(縮尺不同)

	富士山麓	愛鷹山麓	箱根山麓
形成期 約八、〇〇〇年前 一、二、〇〇〇年前	 <p>富士宮：黒田向林 富士宮：箕輪B</p>	 <p>沼津：尾上イラウネ北 沼津：西洞 沼津：葛原沢IV</p>	 <p>三島：初音ヶ原 三島：片平山</p>
発展期 約五、〇〇〇年前 七、〇〇〇年前	 <p>富士宮：代官屋敷 富士宮：若宮 富士：天間沢</p>	 <p>沼津：西洞 沼津：元野 沼津：三明寺</p>	 <p>三島：陰洞 三島：乾草峠 三島：押出シ</p>
成熟期 約三、五〇〇年前 四、五〇〇年前	 <p>富士：天間沢 富士：天間沢 富士：かぐや姫</p>	 <p>沼津：広台 沼津：二ツ洞 沼津：大谷津 沼津：大芝原</p>	 <p>三島：千枚原 三島：北山 三島：北山</p>
終末期 約三、〇〇〇年前		 <p>沼津：雌鹿塚</p>	